

中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。	今年度の重点目標		1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実 (学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 (たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成) 4 生徒に対する指導の充実を図るための更なる学校業務改善の推進			
		年度当 初		評 価 結 果 (10)月			
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評 価	改善方策
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実 (学力向上)	(幼) (1)体験的な活動を通して様々な事象に興味や関心が持てるよう環境や機会を設定する。	(1)きこえにくさにより情報量が少なかったりや経験が不足したりするため、興味や関心が広がりにくい傾向にある。	(1)身近な事象に積極的にいかかわり、気づいたり、考えたり、予想したり、工夫したりする。	(1)個々の幼児の実態を把握し興味や関心が持てるような活動を設定する。 (1)幼児の思考を促し思考を深めるように、5W1Hを意識した声かけをする。 (1)具体物や絵、写真などを補助的に使い、内容の理解を促す。	(1)季節の行事や生活の中で、個々の幼児の訴えを受け止めたり、経験したことを言語化する活動を繰り返したりした。 (1)幼児の言いたいことや幼児に知らせたいことを文字や写真や絵などで提示することで、言葉や物事の理解につながっている。	B	(1) やり取りの中で意識して疑問詞を使う。 (1) 実物に触れることが難しい場合、iPadで動画や写真を提示する。
	(小) (1)基礎学力が向上するよう、学びを深める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	(1)実態把握や個々の実態に適した支援の検討により学力が定着しつつあるが、文章を読もうとしたり、読んで内容を深く読み取ったり、正しく質問に答えたりすること等に課題がある。	(1)主発問を的確に行い、反応を予想して補助的・発展的発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをすることによって、児童が主体的に深く学ぼうとするようになる。	(1)的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施したり、つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。また、一人1授業研究会や授業研究会を行い、発問や正しく答えるための支援を工夫する。	(1)学部研究会で研究の方向性や内容を検討し、その上で具体的な支援方法を共通理解した。児童の実態をもとにわかることばを使って発問したり、発問を視覚的に残すようにしたりした。	(1) 11月の学部での授業研究会や一人1授業を通して、的確な発問がなされているか検討する。児童の変容を学部全員で客観的に評価していく。	C
	(中) (1)目標を持ち、知識や技能を身につけようとする意欲的に学習する態度の育成に努める。 (2)実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。	(1・2)学習状況が様々であり、個に応じた丁寧な指導をすることが必要である。苦手な教科にも積極的に取り組むようになり、学力も少しずつ向上している。	(1)生徒が自ら目標を決めることができる。 (1)知識や技能を身につけようとする意欲的に学習する態度の育成に努める。 (1・2)授業の中で、自分の考えを説明できる。	(1)自分で決めた目標について、到達点が視覚的にわかり、達成感を味わえるよう支援する。 (1)生徒自身が自分の考えを説明できるような雰囲気づくりや発問の仕方の工夫をする。 (2)諸検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、支援方法の共通理解を図る。	会を適宜開き、生徒についての問題を話し合った。 (1)目標のふり返りを行事や学期ごとに行い、活動のまとめを文章化することで、到達したことや自分の課題を確認することができた。 (2)諸検査や懇談の記録等を回覧し、生徒についての情報交換を通して生徒への理解を深め、支援方法の共通理解を図るよう努めた。	(1)目標に対しての評価がしやすいうように、より具体的な目標設定ができるよう声かけをする。 (2)今後も会を適宜開き、生徒について情報交換を行い、共通理解を図る。	B
	(高) (1)進路と日々の学習を意識づける指導と進路希望に応じた教科指導の充実を図る。	(1)進路を意識し意欲をもって学習に取り組み始めた生徒、家庭学習の提出や学習時間の確保に課題のある生徒、学習したことと定着に課題がある生徒など実態は様々である。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	(1)基礎学力や思考力が向上し、自ら学ぶ方法を身に付け継続して学習できるようになる。 (1)生徒の基礎学力や思考力を高めるために、授業における発問の方法などの指導方法について研究を進める。	(1)個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通理解する場を学部会やケース会議、学部研究会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 (1)生徒の基礎学力や思考力を高めるために、授業における発問の方法などの指導方法について研究を進める。	(1)学部研究会で個々の生徒について育てたい力と支援方法について共通理解し、授業に活かすように努めた。 (1)生徒の思考力を高めるための発問について研究を行い指導に活かすようにした。学習した言語を使って説明しようとする生徒の姿が見られるなどその成果が少しずつみられるようになっていく。	(1)個々の生徒について育てたい力と支援方法について引き続き共通理解し授業に活かすようにする。 (1)一人1授業研究会を行い、生徒に対するより具体的な支援や指導方法の研究に努める。	C
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 (卒業後を見据えた生きる力の育成)	(支) (1)乳幼児教育相談で保護者に子どもとのかかわり方について支援するよう努める。 (2)通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。 (3)個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 (4)聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。 (4)聴覚障がい教育に初めて関わる地域の学校の課題意識が少ない。	(1)子どもへの接し方に支援の必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。 (2)きこえについての課題意識がとぼしく、改善に向けて行動を起こしにくい児童生徒が多い。 (3)支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 (4)医療との学習会で情報共有をしたたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っている。 (4)聴覚障がい教育に初めて関わる地域の学校の課題意識が少ない。	(1)保護者が子どもへの気持ちに寄り添いながらかかわるようになる。 (2)場面に応じて学んだことを活かし問題解決をしようとする。 (3)難聴や発音に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようになる。 (4)関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換をし、よりよい支援に努める。	(1)担当者がかかわり方のモデルを示したり視覚的な提示を行ったりするなど支援方法を具体的に示す。 (2)通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、児童生徒の課題に対して共通の認識を持ち、連携して支援できるようにする。 (3)難聴児にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 (4)きこえやことばに関する保護者資料を作成し配布したり教育相談や通級指導の紹介DVDを作成したりして啓発活動を行う。 (4)理解啓発のために、どのような活動ができるのか一覧表を作成し関係機関に配布する。	(1)家庭でもできる遊びを提案することで、家庭で楽しみながら子どもとかわって過ごす姿が増えてきた。 (2)通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と共通理解をすることができた。 (2)連絡帳で密にやりとりすることで、支援会議に結び付き、在籍校、保護者、担当で共通の認識を持ち、適切な指導や支援に繋がっている。生活年齢相応の課題意識がもてるようになってきている。 (3)情報交換会や難聴に関する研修会の案内をし、情報発信を行った。研修会には幼稚園や保健センターからの参加もあった。 (4)きこえやことばに関する保護者資料を作成した。教育相談の中で活用し始めているところである。また、支援部の活動紹介DVDを作成しており、学校祭で発表した。校内向けの情報発信のために支援部コーナーの掲示板を作ったり、理解啓発のための活動一覧表を作成したりした。	B	(1)子どもに応じて視覚的なカードや教具などを工夫していき、家庭でも使えるようなものを提案したい。担当者、家庭、在籍園の連携を引き続き行っていく。 (2)通級担当者で、指導法や教材の工夫などを共有し、より児童・生徒の実態に応じた指導ができるようになる。 (3)地域の小・中学校からの参加者が少ないので、よりニーズに合った研修内容や時期を考える必要がある。地域の学校にアンケートを実施していき、来年度からの取組に活かしたい。 (4)作成した保護者資料や紹介DVDを活用していく。支援部コーナーの掲示板には、補聴器などの様々な情報を提供していく予定である。活動一覧表は、関係諸機関に配布し、情報を発信していきたい。
	(幼) (1)同年齢の大勢の幼児や様々な人とのかかわる場を設定し、かかわり方を支援する。	(1)大きな集団の中で活動する経験が少なく、友達と一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、伝わりにくい経験から消極的になる傾向が強い。 (1)周りの人の様子を見て、補聴機器の有無に気づき始めた幼児がいる。	(1)誰にでも進んで挨拶をしたり、自分から質問したり、話しかけようとしたりする。	(1)自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師が幼児同士の仲立ちをする。 (1)地域の方との交流や居住地域の保育園での交流を実施する。 (1)自分の聞こえにくさに気づき、補聴機器を大切に扱うことができるよう支援する。	(1)教師の見守りのもと、幼児だけで遊ぶ環境を設定した。トラブルが起きた時に教師が解決するのではなく幼児の気持ちを伝えることで、幼児自身が解決しようとする姿が増えてきた。 (1)補聴機器の大切さに気づき始めた幼児が増えてきた。 (1)居住地の保育園で同年齢の幼児と積極的に遊ぶようになってきた。	(1)友達と遊ぶ時に無言で行動することが多いので、かかわる時の言い方やかかわり方について学校生活全般で伝える必要がある。 (1)交流する保育園に対する啓発を継続して行う。	B
	(小) (1)基本的な生活習慣の定着を図り、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	(1)少しずつルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等について自ら判断して守ろうとするには課題が残り、指導が必要である。また、校外の社会におけるルールなどは未経験であることが多い。	(1)学校内外の社会においてきまりやルールを自ら守ろうとすることができる。	(1)地域の人々となつながら経験を通して、どう行動したらよいか考え実行できる場面を設定する。また、場面をとらえて主体的に適切な行動ができるよう声かけを行う。	(1)校外学習を通して各施設の利用の方法や人との接し方について学んだ。 (1)校内では、児童が自ら考え判断してルールを守ろうとする姿が見られた。しかし、ルールが守れず適切な行動ができないことがあった。	(1)他校児童との交流を通して、どう行動したらよいか考える機会を設定する。 (1)ルールを守って行動できるよう、自ら考えて行動する場面を設定する。身につけた力で主体的に活動できるよう促していく。	C

	<p>(中) (1) 自分の障がい等を理解し、自己肯定感を持ちながら自分の課題を克服しようとする態度の育成に努める。 (2) 学校生活や社会生活をよりよく送るためのソーシャルスキルの向上を図る。</p>	<p>(1・2) 自分の障がい等についての理解が十分に進んでいない。自己肯定感が十分にはぐくまれておらず、自発的に行動するのが難しい生徒が多い。</p>	<p>(1) 自己理解が進むとともに、自分なりの課題解決方法がわかり、それを実践しようとしている。 (2) 相手や場に応じた受け答えができる。</p>	<p>(1) 自分の障がいを理解し、自分の良さや課題を知る学習を行う。 (1) 課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する。 (2) 宿泊体験学習や職場見学・交流学习等の校外学習等を通して社会生活に必要なマナーやルールについて学び、日常生活の中でも意識して取り組むようにする。</p>	<p>(1) 生徒が行事で何度か行った学校紹介を通して、聾学校を知る学習は積み重ねてきているが、自分の障がい理解を深めるまでには至っていない。 (2) 日々の生活の中でマナーやルールについて繰り返し話をしたり生徒に問いかけたりしている。また、校外の学習では機をとらえ、その場で話をし、生徒に考える時間を設定した。</p>	<p>(1) 補聴器や人工内耳に対しての意識付けと併せて、障がい理解を視点とした声かけや学習を行っていく。 (2) 今後も機をとらえ、できているときには称賛し、課題があるときには生徒に考える時間を設定する。</p>
	<p>(高) (1) 自立と社会参加をめざし、あるゆる活動を通して、主体的に考え行動できる力を培うための指導の充実を図る。</p>	<p>(1) 高等部卒業後の進路については未定の生徒が多く、職場や大学等の見学、現場体験学習等を通して卒業後の進路決定を意識づけしていく必要がある。 (1) 社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。</p>	<p>(1) 将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい等)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 (1) 社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。</p>	<p>(1) 生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する。 (1) 諸検査や日々の情報交換をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路実現を目指した授業を設定する。 (1) 現場体験学習や職場見学、大学見学などを実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定する。</p>	<p>(1) 日々の生活の中で見られる生徒の課題については適宜共通理解し日々の指導を行ってきている。 (1) 定期テストや模擬試験の結果を見て教員同士で情報交換をし、実態を把握することができている。 (1) 職場見学では、「働く上で大切な心構え」を職場の方から聞くことができた。 (1) 現場体験学習を通し、自分の適性や興味・関心について再認識し、日々の生活に活かそうとする生徒の姿が見られる。</p>	<p>(1) 職場見学や現場体験学習で得られた課題や情報を整理し、卒業後を意識した日々の行動や進路決定へとつなげていく。</p>
心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成)	<p>(幼) (1) 感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。</p>	<p>(1) 自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟で教師の支援を必要とする。</p>	<p>(1) 幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。</p>	<p>(1) 言葉による正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを推し量り拡充機做を促す。 (1) 相手の話を注意して聞いたり相手にわかるように話したりするよう、話し合い活動の機会を適宜設ける。</p>	<p>(1) 言いたいことが相手に伝わるよう手話やキューサインを使うことを促し、幼児同士が分かりあえるようになりつつある。 (1) 隣接する学級で合同活動を組み、幼児が互いにかかわりながら活動する場面が増えている。</p>	<p>(1) 個々の実態に合わせて、手話やキューサインの表現方法の指導を継続する。 (1) 自分の体験を言語で表現する手掛かりとして絵日記を使った指導を継続する。</p>
	<p>(小) (1) 友だちとの活動を通して自分の思いや考えを伝え、相手の話を理解できる力を育てる。</p>	<p>(1) 自分の考えを友だちや先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。また、友だちの話を最後まで顔を見ながら聞いて理解したり、答えたりすることはまだ難しい。</p>	<p>(1) 学校内外の社会で、相手に自分の経験や考えを正しく伝えようとする。相手の話を最後まで聞き、内容を理解し、自分の考えを伝えようとする。</p>	<p>(1) 地域の人々との交流の場では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等のルールを事前に確認する。また、学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや先生と伝え合う活動を設定し、個別の支援を工夫して行う。</p>	<p>(1) 交流の場が増え、いろいろな人との関わりが広がった。児童会活動では、相手の顔を見て話を聞き、自分の考えと合わせて考えをまとめ、伝えようとする場面が見られた。しかし、話し合い活動の場面が少なかったり、場面に合ったマナー・ルールが未習得であったりする。</p>	<p>(1) 交流や話し合い活動の前には話し合いのルールを確認し、めあてを決めたり、練習したりする。児童が集まって話し合う場を設定していく。</p>
	<p>(中) (1) 弁論大会・体験報告会・交流活動等を通して、話す意欲と表現力の向上を図る。</p>	<p>(1) 自分の思いを相手に伝えることについて苦手意識のある生徒が多い。 (1) 周りの状況を把握して行動することに課題がある生徒が多い。</p>	<p>(1) 自分の思いを相手に伝えようとしている。 (1) 相手の立場を考えた言動ができるようになる。</p>	<p>(1) 自分の思いの伝え方について特設自立活動(アサーション等)等で学習する機会を持つとともに日々の生活の中で指導する。 (1) 自らの行動を客観視できる機会を持ち、どのように改善すべきかを考える場面を設ける。</p>	<p>(1) 報告会等で自分の思いをまとめて、相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られるようになった。 (1) 教師とのやり取りや友だちの発表を聞くことで自分の思いを掘り起こし、少しずつ言葉にして表現できるようになってきている。</p>	<p>(1) 自己評価だけではなく、他者評価も取り入れていく。</p>
	<p>(高) (1) 言語力・表現力・コミュニケーション力の向上を図る学習活動の充実に取り組む。</p>	<p>(1) ほとんどの生徒のコミュニケーション手段は手話、指文字、身振り等であり、指示だけでなく実際に体験し確認をすることが必要な生徒もいる。 (1) 自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、自己表現力が向上している。</p>	<p>(1) 交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションを取ろうとする力が向上してきている。 (1) 自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、自己表現力が向上している。</p>	<p>(1) 相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 (1) 自立活動などの時間を活用し、状況に応じた日本語の使い方や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 (1) 岩美高等学校、八頭高等学校、鳥取大学の学生との交流、手話パフォーマンス甲子園や学校祭ステージ発表に向けての学習、弁論大会などを設定し、自己表現力を高められるようにする。</p>	<p>(1) 帯自立活動の時間などで、日本語の使い方、適切なコミュニケーションの取り方について指導を行った。日々の会話の中で日本語の言い回しについて自ら調べる生徒の姿も見られる。 (1) 岩美高等学校との交流を通してお互いを理解し、活動場面で臨機応変に行動する場面も見られた。 (1) 現場体験学習を通して、コミュニケーションの課題を実感することができた。 (1) 手話パフォーマンス甲子園への出場に向けて、よりよい表現になるように生徒同士で意見交換する場面の設定をした。生徒たちは少しずつ活発に意見交換ができるようになり、本番では練習の成果を十分発揮することができた。</p>	<p>(1) 岩美高等学校との交流や弁論大会などを通して、相手や場に応じたコミュニケーションが取れるように具体的な場面を設定し、事前に練習を積んでいく。</p>

評価基準 A: 十分達成 (100%) B: 概ね達成 (80%) C: 変化の兆し (60%) D: まだ不十分 (40%) E: 目標・方策の見直し (30%以下)